
二百文字詩集「コトダマのざわめき」

那音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二百文字詩集「コトダマのざわめき」

【Nコード】

N4052Y

【作者名】

那音

【あらすじ】

今日もコトダマが響きます。

あなたを愛しているから

あなたがいて、その隣に僕がいる。

当たり前かもしれないけど、これがすごく幸せだと思う。

一人きりでは生きられない弱い人間の僕は、こんなにも愛しい人に出会うことができた。

それは、計り知れない奇跡。

何も言わなくても、あなたのことが手にとるように判るから、きっとそういう運命なんだね。

言葉にしたら嘘になってしまいそいだけど、僕はあなたと出会えて幸せなんだ。

もっと近くにいれるように、もっとあなたを知りたいんだ。

いつまでも

いつだって一緒にいれるように、ボクの中に強くキミを残そう。

いつだって思い出せるように、キミを強く覚えていよう。

死んだからって忘れられる程度にキミのこと好きだった訳じゃない。
い。

カタチはどうあれ、ボクたちは永遠を手に入れたんでしょう。

だから、がんばって思い出すよ。

このくしゃくしゃの泣き顔を笑顔に変えてしまっ、キミの声を。

きつとすぐに笑ってみせるから。

キミがいなくても大丈夫なように、強くなってみせるから。

うまく笑おうとしなくても

うまく笑おうとしなくても、きみが笑えばそれだけで空が晴れていくようだよ。

まるで世界中の幸せをここに集めたような、そんな感じ。

なんだかね、見ていだけで心がすっきりするんだ。

苦しいとき、辛いとき、何度も思い出しては歩みを進めてきたんだよ。

うまく笑おうとしなくても、きみはずっと輝いているよ。

そんな小さなことでくよくよしないで、もっと大きな声で語ろう。

うまく笑えなくても、夢はどこかに行ったりしないから。

えっとね、

ボクにはもうわからないんだ。

キミが好きすぎて、なにが正しいか正しくないかがわからない。

うまく言葉にできても、それは当たり前のことです。

ボクがキミをどんなに好きかは、案外伝わったりしない。

まるでやりがいのあるゲームみたいに、いつまでたっても進みやしない。

だけど、きっと無駄じゃないと思うんだ。

……えっとね、キミが大好きなんだ。

今日は、それが言えればいいや。

じゃあね、また明日。

明日はうまく言えるといいな。

おしおき

君にいじわるなことを言った。

君がおかしな顔をした。

ボクはちよつと残念になって、君に話しかけ続けた。

好きになるのは罪なの？

だったら、好きになつてもらえないのは罰なの？

会いたいと思うのは罪なの？

だったら、会えないのは罰なの？

それとも、おしおきとかいう温いものなの？

だめだよ。

君に会えないのはいやだけど、君がいやな顔するのはもっといや。

だから、ボクは黙って、おしおきを受け入れるよ。

大丈夫、心配ないからね。

かぞえきれない

今日また、きみがすてきだと思った。

これでもう何度目だろうね。

今日また、きみがかわいいと思った。

これでもう何度目だろうね。

別れはいつも突然だけど、そんなのあまり関係ない。

どんなに離れていても、すぐそばにいるような安心感。

きみがくれた言葉のぬくもりは、まだ冷めてないよ。

今日また寂しいと思った。

これでもう何度目だろうね。

今日また泣きたくなった。

思いつきり泣いてみた。

初めて泣いてみた。

静かに心が揺れたよ。

きみのきもちもわからないのに。

きつとボクだけは、きみを喜ばせることができると思い込んでた。

どんなにひどいこと言っただって、笑えば許してくれると思ってた。

ボクだけがきみの理解者でいるつもりだった。

きみのきもちもわからないのに。

きみが初めて泣いたとき、ボクの胸に稲妻が走った。

その痛みを盾にして、涙を見ない振りした。

きつとうまく笑えると思い込んでた。

きみも笑うと思い込んでた。

きみのきもちもわからないのに。

ボクのきもちもわからないのに。

くじびき

あたり。はずれ。あたり。はずれ。あたり。あたり。

「はずれの人たちで、今日の放課後お掃除してね」。

先生はゆっくり言った。

俯くと、手のひらにははずれくじ。

友人はそっと同情したけど、同情するのはボクがきみにだろ。

教室掃除のお相手は、みんなの憧れかわいいあの娘。

はずれくじなんてとんでもない。

なによりの宝物だったよ。

おおあたり。

このチャンスに、目一杯あの娘にアピールするんだ。

自然に「すき」って言えるように。

けっこう本気なんだぜ。

冗談ぽく聞こえるのは、案外照れ隠しだったりするんだぜ。

そんな薄っぺらいこと言うのは、案外苦手なんだぜ。

うまくいかないけど、けっこう本気なんだぜ。

キミが好きだ。これ以上ないくらいに。

世界で一番好き。

冗談ぽく聞こえるのは、案外照れ隠しだったりするんだぜ。

好きって簡単には止まらない感情。

笑えるかなんてその時次第だから、いちいち悩むのはアホらしい。

だからまっすぐ届くように。

ずっと、キミのこと、好きなんだ。

こころが揺れた。

ふとした瞬間に、ふわり、こころが揺れた。

見慣れているはずの君の横顔なのに。

君ってこんな表情もできるんだって、きづいた。

そのとき、こころが揺れたよ。

固く閉ざしていた、ちっばけなこころが揺れた。

なんだかね、いつもと違うの。

「好き」ってのとはちょっと違う。

それよりも、見てて和む、そんな感じ。

ねえ、これも「好き」ってことなのかな？

よくわかんないや。不思議だね。

大人になったらわかるのかな。

ねえ、教えてよ――

さあ行こう。

クヨクヨしたって時間の無駄さ。

十年後に、絶対後悔するって！

今日明日のこと変えるなら、思いきって即行動！

最初は誰も臆病なだけさ。

だいじょうぶ、きつとうまくいくって。

イメージできたなら、さあ行こう。

キミに手招きしてるのは、きつと明るい未来だから。

前だけを見るのが不安になったら、いつでも振り返って良いから。

だから、勇気を出して一歩進んでみようよ。

きつて景色がやさしくなるさ。

悩むくらいなら、さあ行こう！

しょうがないを言い訳にするな

「最近どうも調子悪い」。

だから？

「しょうがない」？

そう考えてるなら、一生つまくなっていかないだろうね。

しょうがないを言い訳にすると、自分も周りも納得しちゃうかも
しれない。

だけど、それって結局進歩してないじゃん。

だから、おまえに伝えておく。

未来の、そして過去の俺に。

よく聞け、覚えておけ。

しょうがないを言い訳にするな。

そんなこと言っていると、反省しない。進歩しない。

なあ、わかるだろ。

気づけたら、勝ちだ。

すきの理由なんて

だいたい、そんなこと言ったら嘘っぽくなっちゃうよ。

あることないこと喋り散らすよりは、謙虚に誠実に正直にね。

キミが笑えば万事解決、損得勘定も関係ない。

だって、ボクにとってそれだけがすべてだから。

なにもないはずの心に、芽生えてたんだ。いつの間にか。

キミならわかるでしょ。

理由なんて知らない。理由なんて知らない。

事実を理解できればいいんだから。

強いて言うなら、キミがいるから。

すきの理由なんて、そんなもん。

せのびなんかしないでさ

ちょっと遠くを見るためだけにせのびしちゃっていいのかい。

来た道も振り返れないのに、もう先ばかり見てるのかい。

なんなんだろうね、よくわからないけど。

いいことがあったら、それはきっと君の努力のお陰だろ。

だったら、せのびなんかしないでさ、真っ直ぐすすんでみろよ。

すぐになにもかもできるわけじゃないけどさ、今しかできないことってあるだろ。

だったらまずはそれをしようよ。

心配しなくても、失敗しないから。

大丈夫。

そばにいるから

そんなこと言えたらなんて楽だろう。

かつこつけてるとか、そんなんじゃないけど。

そういえば、昔誰かも言ってた気がする。

本当に苦しいときに恥ずかしげもなく言えるのが勇気だ。愛だ。

そんなのわかってるさ。だからこそその言葉だろ。

表情とは違う形で愛を伝えるのが言葉だろ。

そばにいるから。それだけで君が笑うなら嘘なんてつけないさ。

そばにいるから。嘘じゃない。そばにいる。

なにがあっても、ずっと。

だって君が好きだから。

たびにでもでればいいじゃん。

大っ嫌いで、大好きなもの。

全部知ってるつもりで、なにも知らないもの。

自分自身がクヨクヨするようなときは、なんだか周りはフキゲンだったりする。

自分探しだとか、かっこつけんなよ。

別に誰も止めようとはしない。

たびにでもでればいいじゃん。

そして、必ず大きなタカラモノを持ち帰ってくるんだ。

周りの声に左右されるような、器用な思考回路持っていないんならさ。

たくさん泣いて、たくさん笑って。

それができりゃ、儲けもん。

ちがうなにか

朝陽が昇れば、なにか変わるのかな。

月を憂いているだけじゃ、なにも変わりそうにないね。

だって、暗い気持ちだけしか伝わらないよ。

笑顔の意味さえ忘れて、泣きやいいと思い込んで。ちがう？

明日になったらとか、うまくいったらとか。

そんなんじゃないくて、ちがうなにか。

もったあったかくて、もって照れくさくて。

もっとやさしくて、もっと——きみらしいこと。

ちがうなにか。案外それは、意外にもすぐ近くにあったりするんだ。

つかれてる？

最近、あんまり笑わなくなったね。

なんでだろう。あんなに素敵な笑顔だったのに。

ねえ、大丈夫？　ちゃんと眠れてる？

そっちがそんなにしぼんでると、なんだかこっちまで悲しくなっちゃうよ。

つかれたらなら、無理なくていいからね。

休みたければ、休んじやえばいいよ。

体壊したら、余計に笑えないよ。

どうせ無理するなら、無理して笑えよ。

つかれたときには、笑うのが一番だって。

ゆっくり休んでね。

明日にはもっと笑えるように。

てのひらよりも

ボクは黙って差し出した。

キミも黙って握り返した。

少しかだけ汗ばんでるけど、キミが隠したがつてる。
だから、知らんぷりで鼻唄をうたう。

キミの鼓動はなんか早くて、つられてボクのも早くなるよう。
右手と左手は仲良く、でもまだ目は合わせられない。

キミがクスクス笑ったから、ボクはニヤニヤ笑ってみる。
なんでもないことのような気がして、忘れまいと強く手を握った。

ボクのくちびるは、まだキミのくちびるをおぼえているから。

ともだち

たとえば笑うだけで心は晴れる。
たとえば泣くだけで心は腫れる。

細かいこと気にしすぎだつて。

そんなことないだろ、ぜんぶだいじなこと。

心が痛むなら傍にいよう。
できるだけ君のすぐ傍に。

慰めてさ、励ましてさ、そして最後に笑えりやいいじゃんか。

今更なんて、ボクと君はずっとずっと近いはず。

やっぱりそうだね。

君が笑ってんの見ると、ムッとなんてしてられない。

ともだちなら。

ともだちだから？

ともだちじゃん。

ともだちだろ。

なんでかな

キミといるだけで、なんだか心が晴れていくようだ。
なにも望まないのに、どんどん幸せになっていくんだ。

ボクにとって太陽のように、キミはまっすぐ輝いているよ。
なんでかな、うまく言えないけど、体がじっとしてられないよ
うな、不思議な感覚。

キミと一緒にないとまずたどり着けないような、すごくすごく
遠いところ。

キミがこんなに近くにいてくれるから、手に入りそうな気がする
んだ。

キミがいなけりゃ、気づけなかったよ。

にげるな。

怖い？

—— だろうね。

きつい？

—— だろうね。

疲れた？

—— だろうね。

だからって、逃げるのかい？
逃げれるのかい？

うまくいかないとか、誰も理解してくれないとか、言い訳はいくらでも作れるよね。

でも、それで納得できるとは限らないもの。

理不尽には怒ればいいし、少なくとも逃げるようなことじゃない。
うまく笑えないからって背中見せるのは、なんだかちよつと違う。

あのね、涙は流していいんだよ。
しっかりと前さえ向けてれば。

ぬいぐるみ

黙っとけば可愛いつてよく言われる。

だけどそんなんじゃダメ。あたしはダンシングドール。

じっとしてるぬいぐるみじゃないの。

なんだか損してるみたいじゃない、動かないと。

何も言えないまま事が終わると、どうせ残るのは喪失感とか虚無感とか、そんなもの。

だから、可愛いぬいぐるみじゃいられないの。

踊り続けて疲れるくらいが、楽しかったって言えるじゃない。

暗いことも乗り越えて行けば、きっと笑顔に迎えられるはずだから。

ねむってしまえば

たとえば辛いことがあったとして。

たとえば悲しいことがあったとして。

たとえば泣いてしまったとして。

たとえば怒ってしまったとして。

もしもいい夢が見れたなら、多分きつといい気持ちで笑えるよ。
ねむってしまえば楽になるって！

どうせ、よくないことはっか思いついてるんでしょ？

どうしても無理って思うんなら無理しないでさ、たまにはゆっくりと眺めてみようよ。

いままで早足で通りすぎてきた景色をさ。
以外といいもんなんだ。

のんびり行こうか。

後ろを見るなとは言わない。

だけど前ばかり見てると飽きちゃうでしょ。

誰かのペースなんて気にしないでさ、たまにはのんびり歩いてみなよ。

いいことばかりじゃないかもしれないけど、悪いことばかりでもないだろ。

寂しくなったらいつでも思い出せるように、しっかりと瞳の奥に焼きつけているでしょ。

のんびり行ったからって損をする訳じゃない。

今まできづけなかったいろんな事が、きっとわかるようになるから。

のんびり行こうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4052y/>

二百文字詩集「コトダマのざわめき」

2011年12月5日11時50分発行